

---

# 死神になった青年

Freedom

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

死神になった青年

### 【Nコード】

N0294Q

### 【作者名】

Freedom

### 【あらすじ】

中学の時に家族が事故で死んで、今は高校生の主人公。

最近まで一人暮らして頑張ってきていたが、精神的な疲れが溜まり、フラフラしていた。

其処に来たのは、大型トラックだった。

## プロローグ(前書き)

始めます！

## プロローグ

俺は、志木<sup>しき</sup> 隼人<sup>はやと</sup>。

一人暮らしの高校生だ。

まあ、高校生で一人暮らしなのは、家族がもう居ないからだ。

家族が居なくなっただのは中学の時だ。

あの時、家族で買い物に来ていた。

俺は、その時、家族と離れていた。思春期だったから、恥ずかしかった。だが、今なら家族とは離れなかつただろうな。

そして、俺は家族を見ていた。そして、ふと目と違う方へ向けたら、家族が居たほうから爆発音が聞こえた。

俺はすぐに家族のほうへ顔を向けた。

だが、家族は全員、爆発に巻き込まれて、無残な状態だった。

その日から、俺の日常は壊れた。

そして、俺は壊れたまま、高校まで上がっていった。

今では気の置けない友達も居ない。

そして、そんな無気力な日常は、突然終わりを告げた。

下校途中に一台の大型トラックが、俺の方へ突っ込んできた。

この時には、感謝した。やっと、家族の元へ行けると・・・

俺が目を開けると、其処は、真っ白な空間だった。

「何処だ此処は？」

ふと出た疑問だった。答えるものも居ないと思い、声に出した。  
だか、返答が来た。

「此処は、地獄と天国の狭間。ここで、死んだものは天国に行くか地獄に行くかの審判に掛けられる。」

その声が聞こえた方へ顔を向けると、お爺さんが居た。

だが、何か違う。このお爺さんは只者ではない。

「お爺さんは、一体誰なんですか？」

「私は、君達の言う神だ。」

「そうですか。では。聞きたいことがあります。家族は今、如何していますか？」

どうしても聞きたかった。聞かないと、安心できそうにない。

「君の家族は皆、転生先で幸せになつとるよ。」

「それはよかった。では、自分に対しての審判を始めてください。」  
家族の事が聞けたので、もう如何なっても良い。

「では、君には平行世界に行ってもらおう。まあ、バトル要素があ

るから能力は渡そう。何が良い？」

そんなことを突然言われても反応できない。

少し考えて出てきたものは、此れだった。

「では、死神の力を下さい。7 GHOSTの。あと魔法を使えるようにして下さい。完全記憶能力もほしいです。魔力とか、気力とかも無限に欲しいです。生き残りたいですからね。」

ざっとこんなモンだろう。これで生き残れる。

「わかった。ではその7 GHOSTの最高の死神、フェアローレンの力を授けよう。セブンゴーストは召還できるようにした。死神に成るにあたって不老不死になるが良いか？」

「良い。」

「では、平行世界に送る。ちなみにアニメの世界だ。まあ、君は死神の力を手に入れた。命の重さを知ってもらおう為にそのアニメの本編が始まる1万年ほど前に送る。ああ、魔法の知識は頭に入れとくぞ。能力の使い方もな。では、達者に暮らせ」

そうして、俺の意識は落ちていった。

## プロローグ（後書き）

だいぶマシになった。

## 異世界での覚醒(前書き)

遅くなって申し訳ない！  
どうぞー！

## 異世界での覚醒

神に異世界に届けてもらい、最初に見たものは大きな木でした。

「これは凄い。」

此処が何時の時代かは分からないがこの木だけは残しておきたいと思っただ。

「今日から此処を拠点としますか。」

そんなことで、私の異世界生活がスタートした。

その日から、いろんなことをした。

まず最初に自分の能力の確認をした。

その確認中に気が付いたのだが、私には魂の音が聞こえているようだ。

それは私が何とも無しに猪を狩った時に起きた。ちなみに私には食事が必要無い。死神だからな。

そしたら、頭の中に”意思”が流れ込んできた。

” 助けて、助けて、助けて！”

それは、先ほど殺した猪の魂が発している言葉だった。

その時、私は叫んでいた。自分のした事の過ちに。

「なぜ私は無関係の者を殺したんだ！私には食事は必要ないのに、なぜだ！」

その日から、私はそのことを踏まえて生活をしていった。

草などは極力踏まないよう飛ぶか、木の枝から枝へ飛び移って移動した。

そうしてまず、”自分だけで”使える能力を確認した。

そして、その能力を完全に扱えるように成る為、1000年ほど費やした。

今度は、得物を使つての能力の使い方を確認した。

得物はなぜか三角の黒い板の表面に何かの黒い宝石の付いた物だった。

最初はなんだこれ？と不思議に思い自分だけで使える能力の制御を完璧にするまで無干渉だったのだ。

ちなみに何故こんな得体の知れない物が得物だと分かったのかとい

うと転生後、ポケットの中に神様の手紙と一緒に入っており、何で私の得物の鎌になるとか。しかも、これは”デバイス”という奴で、魔法を使うにあたって補助をしてくれるらしい。あと形状変化もできるらしく、形状は、通常は斧、ハーケンと唱えれば鎌、ザンバーと唱えれば大剣に成るらしい。不思議だ。

しかも他にもなんか能力があるらしく、”レヴァンティン”と唱えると、片刃剣になるらしい。一度やって見たが、日本刀に形状は似ており、鏢の部分が変な形状をしており、その鏢の部分の上にはなにか穴の沢山開いたカバー見たいのがあってその下には長方形の穴が開いており、何に使うかさっぱりだった。ちなみにその状態から”シュランゲ”と唱えれば連結刃になり、”ボーゲン”と唱えれば鞘が出てきて鞘と剣の柄をつけると、繋がり、弓となる。矢は俺の”魔力”を圧縮して造る為、本数は無限だろう。しかも上手く制御できれば、一本矢を放つとその矢が幾百、幾千、幾万もの矢になり、相手に向うそうで、とても驚いた。

この二つの扱いには両方あわせて100年掛かった。何せ使い方が頭に流れてくるのですぐに扱えるようになった。

ちなみに両方とも色は漆黒で、名前は”デスサイス”というらしい。名前を呼ばなくても変われと思ったら換わってくれたので名前を読んだことはない。

ちなみにこの二つには”ベルカ式カートリッジシステム”が搭載されているらしく、何でも魔力を籠めた薬莢をロードして籠められていた魔力を開放し一時的に魔力を高めているらしい。

そのカーとリッジとやらはポケットからいくらでも出てきた。籠め

られた魔力は甚大で、ロードしなくても良いなと思うほどだった。ちなみにデスサイスの斧、鎌、大剣の状態の時のカートリッジの搭載数は、六発、日本刀、連結刃、弓は二発らしいが、使ったら勝手に補充してくれるらしく、無限にロードできる。絶対しないが。

それと、死神らしくすべての状態で相手の魂には干渉可能だ。相手の魂に傷をつけるのも可能。

とりあえず、最初の2000年は自分の把握に努めた。

其処からは七人の死神達との模擬戦。セブンゴースト

模擬戦といっても本気で殺してくるので日に日に戦闘経験は上昇している。其処から500年ほどずっと修行に明け暮れていた。

修行が終わってから神に「お主とまともに戦えるの、もうワシのマジの力だけになつとるぞ?」

といわれた。一言で言えば私に適うのは本気で相手を殺しに掛かった神様以外に居ないそうです。私強いですね。



そして、さらに時は経ち、原作が始まる

魔法少女リリカルなのは 死神になった青年、始まります。



## 異世界での覚醒（後書き）

気づいてると思いますが、デスサイスはバルディッシュとレヴァンティンです。色は全てが漆黒です。  
カートリッジさえも・・・

## はじまり(前書き)

遅くなつてすいません。

はじまり

ここはとある公園

その公園で、一人の少女が泣いていた。

「グスツ……………」

その子はなぜ、一人で公園で泣いているのだろうか？

何か悲しいことがあったのだろうか？

そんな事を思っているうちにその子に話しかけていた。

「どうした？どこか痛いのか？」

怪我ならば、私が治そう。

「うん、痛いの」

「ならば、傷を見せてみる。治してやるわ。」

私は癒しのザイフォンを掌に出して傷を見せてもらおうと近づいた。

「うん、心が痛い。」

私は固まった。この子は、心が痛いと言った。

「なぜ、心が痛い。」

心の痛みならば、完全には治せない。だが、有る程度なら、緩和できる。

「パパが大怪我しちゃって、入院してるの。そしたら、お家でやってるお店、ママだけがやることになって、忙しそうで、迷惑かけたら駄目だと思って大人しくしてた。けど、辛くなって此处で泣いてるの。」

これは・・・どうすれば良いだろうか？

「姉妹はいるのか？」

姉妹がいれば、何とか成る。

「お兄ちゃんとお姉ちゃんが居るけど、お姉ちゃんはママのお手伝いをしていて忙しいし、お兄ちゃんは、怖い顔して道場に籠っちょてるの。」

さて、頼みの綱が消えてしまった。

こうなつては残るのは私しか居ない。さてこの子は未だ俯いたまま、私の姿を見て怖がらないだろうか？まあ、掛けてみるか。

「顔を上げなさい。」

「ふえ？」

少女が顔を上げ、私を見た。私は死神、一般的な人が描いている死神そのままの姿をしている。骸骨で、フード付きの全身を覆う黒いマントをしている。

少女と目があって数秒、少女はこう言った。

「死神さんだったの？私の名前はなのはだよ！」

こう、明るく言った。

このとき、私はこの子の笑顔を守りたいと思った。

「私の名前はフェアローレンという。よろしく、なのは」

「うん、よろしくなのー！」

また、明るく、無邪気に笑った。

「君は、私と遊びたいか？」

この子は今一人。支えになる人物が必要だが、心当たりが無い。そうなる、自分しか居ない。

「うん！」

「そうか。なら、遊ぼうか。」

私は受肉し、少女と同じ5歳くらいの姿になった。

「死神さん？」

「そつだ。何か不満か？」

私の服装は変わっていない。其処に不満があるのだろうか？

「違つの。／＼／」

顔が赤い気がする。大丈夫なのだろうか？

「ならばいいのだがな。」

私は、その子とできる限り遊んであげた。

はじまり(後書き)

文章が可笑しい気が・・・

日常（前書き）

かなり放置してしまいました。  
申し訳ない。

## 日常

私の一日は、ある時を境に変わった。

この世に生を受けてからは、能力の把握や制御などをして過ごし、得物の把握や制御もして、その後七人の死神達との模擬戦セブンゴーストという修行。これにより、私をこの世界に送った神より強くなったらしい。しかし、ただの死神に倒されてしまう神ってのは些か問題ではないだろうか？

とまあ、こんな感じの日常だった訳だが、この頃は「なのは」彼女と共に過ごしている。出会いは前話で分かっているとうり、泣いている彼女を私が見つke、遊んであげたということだ。

遊びの内容はまあ、女の子がやりたいと思うような事だらけで、正直、精神的に参ってしまった。その後は彼女たつての希望で、私が彼女にだけ見える状態になって、常に彼女の隣に居ることだった。

どのように過ごしているのかは、授業中ならば、窓辺に座っていたり、外の木の枝に座って、ずっと彼女を見ている。なんでも、私が見ていると安心できて、しかもやる気も出て来るんだそう。実際、私が見ている変わったように頭が良くなったり、体育でも、転ぶことが少なくなっているのが本当なのだろう。

しかし、何故私が見ていると調子が良くなるんだ？軽くなぞだ。

さつきから彼女のことばかり喋っているが、七人の死神はセブンゴーストどうしているかと言うと、町をうろついているそうだ。ご老人には姿が見えていないそうで、一人身のご老人の家に行つて、相手をしているらしい。話相手になつてあげたり、将棋や囲碁もしたりしているそうだ。

何でも、お年寄りの間では、優しい死神さんと呼ばれているらしい。  
斬魂ゼヘルが相手をしているご老人から聞いたらしい。うれしい限りだ。

さて、話を彼女に戻す。登下校の時は、彼女の後ろを付いていつている。人がいない時は話し相手になつていているが、他に人が居る場合、彼女は独り言を言っている少女になつてしまうので会話はしていない。学校の休み時間には、彼女は友人と共に過ごしている。最近仲良くなつたらしい。名前は確か「すずか」と「アリサ」だったと思う。友人達には私のことは言っていないらしく、「いつか話すの！」と笑顔で言っていた。何故笑顔なんだ？

家まではさすがに入っていない。彼女を家まで送つた後は、公園で木の根元に座り、公園で遊ぶ子供達を眺めて過ごす。

夜になつたらあの巨大樹の所に行つて、枝に座り、夜を眺める。昔は空いっぱい星が見えていたが、今では見る影も無い。

そして、誰もが寝静まった時、<sup>フェアローレン</sup>全魂と七人の死神<sup>セブンゴースト</sup>の日常の一環の模  
擬戦が始まる。

最初に動いたのは、<sup>フェアローレン</sup>全魂から、<sup>フェア</sup>デスサイズをシュベルトにして、<sup>フェア</sup>繋

魂に斬りかかる。が、それを遺魂レリクトがボーゲンで矢を無数に放ち、全魂ソールを牽制する。そして、その後ろから、斬魂ゼヘルがハーケンを振り下ろす。それを受け止め、押し返すと、今度は契魂フエアトライクがザンバーで、消魂ランドカルテがアサルトで斬りかかってくる。それを跳んでかわすと、着地場所付近にいた言魂プロフェがシユランゲで全魂フエアローレンを捕らえ、地面に叩きつけるが、ザイフォンで衝撃を緩和し、今度は醒魂エアに斬りかかる。

こんなことが、夜の海鳴の浜辺付近で起こっていた。

日常（後書き）

相変わらず、短いなあ。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0294q/>

---

死神になった青年

2011年10月7日08時16分発行